



猛暑がようやく和らぎ、秋の気配が虫の音とともに訪れた。お盆には故郷に帰省し、小学校の同窓生の集まりに参加した。1学年1クラスで6年間過ごした仲間は、家族さながら。一気に50年タイムスリップし、童心の時間を大に楽しんだ。その折、最も近所に住んでいた同級生の実家で所有する山の話になり、さっそく豊岡で立ち上がった「ネクストグリーン但馬(NGT)」につなぐことになった。全国では耕作放棄地以上に、人が入らなくなり、放置された山林があふれている。「NGT」はその山林を地域の財産として復活させる挑戦であるが、身近に入れる山が存在するとは思っていなかった。この話のちょうど1か月前に、労協連の永戸理事長が『里山資本主義』(藻谷浩介・NHK広島取材班著、角川oneテーマ21)について興奮して紹介してくれた。マネー資本主義が荒れ狂う中で、足元や身近にある地域資源を見直し、それらを取り入れた仕事と暮らしを融合させる、小さくとも壮大な革命的取組みの数々を紹介する本だ。GDPでは推し量れない「地域循環型経済」「コミュニティ産業」といえる萌芽に、胸が躍った。そして、「FEC自給コミュニティの創造」という2年来のテーマが、一気に実現可能な実践として鮮明となった。その中心が「森」「里山」である。さっそく友人の山をどうするか、相談の機会に出かけようと思う。本人たちももはやどこにどうあるかわからない。登記簿上は東京ドーム3

個分。この山を使って、わが故郷の仕事おこしが、若者や生活困窮者の就労創出という課題と結んで始められそうだ。

お盆が明けて、「モデル総合福祉拠点推進会議」が開かれた。全国10か所をモデルに指定し、半年かけて真のモデルに全国の力と知恵を集めて育てる、その第一歩である。地域にある社会資源とその結びつきを材料に、どんな総合福祉拠点が構想できるのか。その要点は、「ワーカーズコープの拠点」を超えて、「地域(づくり)に拠点」として描きつくり出すこと。そしてそれは、地域のみんなが参加し、みんなの幸せを実現するための、建物ありきではない、拠りどころにしていくことだ。都市モデル・農村モデル・離島モデルなど、多彩な10か所の物語を、ぜひ研究所としても追いかけて頂きたい。

お盆前には、厚生労働省の委託研究を協同総研が受けることになったという朗報があり、さっそくその準備を開始した。生活困窮者をはじめとする就労・自立支援の制度化から、「中間的就労」が注目されている。単なる一般就労への移行・準備の就労という意味合いだけでなく、持続的で地域に深く結びついた「コミュニティ就労」として成立させるための調査研究だ。それは、社会と断絶した人が、もう一度働き生きていくうえで、必要不可欠な「結び合い」を基礎とした就労。業種も課題だが、それ以上に「働き方」と「働く関係」が問われる。